

古文の学力を育成する上での課題

藤井明子

一 勤務校の概要

私の勤務する岡山中学校・岡山高等学校は中高一貫の私立校である。主に大学進学を目的とした生徒が集まっており、高い志を持って勉強に励んでいる。少子化の影響もあり私立高校では生徒数の確保が課題となっている。このような状況下にあつて、学校の改革も進み、二年前から「東大・国立医学部コース」を開設し、再度進学校としての新たな飛躍を遂げようと学校をあげて尽力している。

土曜も午前中平常授業を行い、放課後・長期休暇を利用して補習授業をするなど、学習指導に力を入れている。生徒・保護者ともに大学進学への意欲が高いのが特徴である。

二 生徒の実態

私は現在高校二年生理系クラスの担任をしている。教科指導では、古文と漢文の授業を担当している。中学一年時から学年団の教員と

して持ち上がっており、生徒達とは五年目の付き合いになる。中学三年生までは現代文を中心に担当しており、高校一年生、つまり内容的には高校二年生内容から古典分野を担当することになった。生徒達は非常に素直である。授業中も感じたことをすぐに言葉に出し、意欲的に取り組む生徒が多い。

三 学習の状況とこれまでの指導の反省点

古文については、現在までは左記のように学習してきた。

中学一・二年時 竹取物語・平家物語・徒然草・説話

中学三年時 竹取物語・説話

動詞・形容詞・形容動詞の学習

高校一年時 伊勢物語・徒然草・方丈記

動詞・形容詞・形容動詞の復習と助動詞

中学内容の反省点としては、難解な文法事項にも触れ、生徒に「古文は難しい」という意識を持たせてしまったことである。初めて古文に触れる生徒には、映像教材の使用や群読などを通して古文学習

の楽しさを実感させ、抵抗感を無くすことに専念すべきであった。

そして、中学生のこの時期に、現代語としての国語力の基礎をしっかりと育成しておくことが大切であったと今でも悔やまれる。特に、主述の關係や、連体修飾と連用修飾の違いなどを、高校生になって理解できない生徒が多数いた。高校内容に入った中学三年時において、担当者の変更もあり、古典文法と口語文法を関連づけた指導ができなかった。中学内容と高校内容を関連づけて指導できることが中高一貫教育の利点でもあるわけだが、それをうまく活かせなかった。

中学三年生・高校一年生は中高一貫教育においては中だるみの時期であり、非常に学習の定着に時間がかかった。特に動詞の基礎が全く理解できていない生徒が多く、中学時につまずいた生徒をもう一度基礎から指導するため、高校一年時に用言の復習に時間を費やした。結果、敬語の学習を高校二年生の一学期に行うことになった。本校の例年よりは進度的にかなり遅れている状況である。高校三年生時のセンターや二次試験対策の演習に耐えうる学力を今年度中に育成しなければならず、担当者としては少々焦りを感じている。理系生徒の中には「国語は受験で使わないから勉強しない」と公言する生徒も出始めている。学校としても英・数に力を入れており、「国語離れ」をいかに防ぐかが今後の大きな課題となるのを感じる。

しかし、受験科目としての要・不要にとらわれて成績の数値を追い求めるのではなく、いかに生徒に古文の魅力を伝え、自発的に学習に向かわせるかということが大切だと思う。成績はその結果としてついてくるものであると信じて指導に取り組んでいる。

四 古文に対する意識

今回の発表を機会に、生徒の古文に対する意識を調べてみた。

A 古文の学習がおもしろいと回答した生徒の主な意見

- ① 昔の考えと今の考えの違いがわかっておもしろい。
- ② 古典の世界観がわかっておもしろい。
- ③ 現代でも共通する部分がおもしろい。
- ④ 物語として歴史がわかっておもしろい。

B 古文の学習がおもしろくないと回答した生徒の主な意見

- ① 読んでいて何を言っているのかわからない。助動詞を必死で覚えたが文意が掴めない。
- ② 自分と価値観が違うし、わからない語ばかりでくる。
- ③ 人生において必要性を感じない。
- ④ 実用性がない。受験のためという悲しい現実しかない。
- ⑤ なぜ昔の文学を勉強しなければならないのかわからない。

A おもしろいと回答した生徒の①③は、昔と今の生活や価値観の違いに興味を持っていることが学習意欲に繋がっていると思われる。また④のような生徒は、歴史と結びつけて古文のおもしろさを感じているようである。B おもしろくないと答えた生徒の回答については、①は、古文単語についての知識が乏しいことに起因するのではないかと思われる。これまで文法に力を入れて学習を進めてきたため、古文単語について、生徒達はほとんど知識がない。また②のような意見も多数あった。これは、現代社会に生きる自分たちの

感覚そのままに古文を読むことから生じてくる意見ではないかと思う。価値観が違ってもそこに生きるのと同じ人間であり、何らかの感情を抱いている。当時の社会や習慣を知り、その時代の人間の視点に立って古文を読むことができれば、現代人である生徒達も共感できる点が少なからずあると考える。③④⑤の意見とも関連することであるが、このように受験のため仕方なく勉強する生徒達に、古文の世界で生きる人々の息づかいを感じさせるような授業を目指したいと思う。

五 授業の方針

一々四までの反省と生徒の現状をふまえた上で、私が今年度の授業で力を入れて取り組んでいくこと、工夫したいことを考えた。

1 現代と古典世界における生活・社会の違いを捉えさせる。

2 1を押さえた上で、登場人物・作者の心情を捉えさせる。

3 古文単語の語感を捉えた上で、語彙を増やす。

古文を「難しい」と感じている生徒が、「わかる」、「おもしろい」と感じるように、なおかつ確実な学力が身に付くようにしていきたい。

六 実践例

(1) 「虫めづる姫君」

実施時期 七月末（夏期講習前期）

時間数 各クラス二時間（小テストの時間を含む）
対象 高校二年生
目 標 ①古文の単語を知る。

②平安時代の歴史や生活習慣について学ぶ。

③「虫めづる姫君」の考え方を捉える。

○ 指導の意図・手だて

理系は二時間しか時数がないため、冒頭部のみを扱った。細かな助動詞の解説は省き、単語の意味を説明しながら文脈を捉える形式をとった。この際、なるべく漢字を用いて語感として捉えることができるよう留意して説明した。傍線部の箇所を中心に適宜生徒を指名し、単語を終止形に直させ、現代語訳をさせる形式をとった。内容の読解としては、③の姫君の考え方を捉えることに目標を設定した。「人はまことあり、本地たづねたるこそ心ばへをかしけれ」の一文から、「蝶・花」は表面的な美しさの象徴であり、「毛虫」は内面に本質を隠し持つものである、とする姫君の主張を捉えさせた。姫君の印象的な描写にも着目させた。生徒達の反応はよく、毛虫を観察する場面では口々に率直な感想を述べていた。

○ 「授業の方針」(五)と関連させての工夫

「お歯黒」や「眉墨」の風習を本文から読み取らせ、絵でかきこませた。現代の感覚からすると、自然な眉で歯の白い「虫めづる姫君」の方がかわいい、といった意見が聞かれた。当時の感覚からすると姫君の様子は「あやし」であり、その感覚の違いは生徒にとって新鮮だったようである。その他の留意点としては、

「女房」の存在や、「いふかひなき(者)」という表現である。特に、後者をもとに、当時の言語文化を担ったのは貴族であり、一般庶民がどのような存在だったかを考えさせることができた。

(2) 「古文の単語力強化講座」

実施時期 八月三日(夏期校外学習合宿特別講座)

対象 高校二年生 希望者

目標 古文単語の語感を捉えた上で語彙を増やす。

○ 指導の意図・手だて

岡山高校では夏期長期休暇に希望者対象の学習合宿を実施している。科目ごとに講座が割り振られるが、古文では語彙力の強化を目標にした講義を行った。助動詞や敬語の学習につまずいて、古文に嫌気がさしている生徒も多い。単語であれば文法的なつまづきをあまり感じずに学習することができ、学習に対する意欲を喚起できるのではないかと考えた。実際に、これまで全く学習に向かっていなかった生徒も単語を覚えはじめ、「最近古文が楽しくなってきた」との声も聞かれるようになった。

○ 「授業の方針」(五) と関連させての工夫

3が目標である。次に紹介するのは、特に歴史的な背景を意識して取り上げた例文(後鳥羽院の和歌)である。

この時の後鳥羽院の心境がまさに「あぢきなし」という言葉の語感をよく表していると考え、例文に選んだ。単語を学ばせる際の例文は、その言葉の語感がつかみややすい内容でなおかつ記憶に残りやすいものを吟味して選ぶよう注意しなければならないと思う。与え

る例文によって生徒達の関心度が全く違っている。また、「味気ない」という現代語を挙げて、現代語と関連付けたり対比させたりし

★使用した例文(ワークプリント形式)

一 (一)

人もをし 人もうらめし あぢきなく

世を思ふゆゑに 物思ふ身は

後鳥羽院

(授業での説明) 後鳥羽院が生きたのは平安から鎌倉に時代が変わり、皇族・貴族から武家の人間である將軍へ政治の実権が移行した時代である。鎌倉幕府との軋轢、皇族の権威が衰えていく絶望的状况の中で、後鳥羽院が世の中をどう見ていたか。この和歌においてそれを表すのが「あぢきなし」という語である。

て言葉への関心を持たせた。

これまで生徒に単語を覚えさせようと小テストを繰り返して実施してきたが、それではなかなか単語の習得に結びつかなかった。時間を要するが一つずつの単語をしっかりと説明した方が効果があるように思う。しかし、受動的な生徒が多く、自分で辞書を引くことをしないので、この点をどう改善するかが今後の課題である。生徒が自然と「辞書を引きたい」と思うような取り組みとなるよう、さらに工夫が必要であると思う。

また、長文を読解する授業で単語の意味、語感の説明に時間をかけると、どうしても進度が遅れ、作品を読む際の鮮度が失われてし

★参考 その他の単語と例文

【一】(一) (一)
主上(安徳天皇)、今年は八歳にならせ給へども、御年のほどよりはるかにねひさせ給ひて、御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。

【一】(一) (一)
いかにせむ 命は限りあるものを 恋は忘れず 人はつれなし

【一】(一) (一)
身まかりなんとて詠める

【一】(一) (一) ↑ ↓ 【一】
露をなど あだなるものと 思ひけむ 我が身も草に おかぬばかりを

【一】(一) (一)
この所に住み始めし時はあからさまと思ひしかども今すでに五年を経たり。

まうという問題を感じていた。本稿の内容を第47回広島大学教育学部国語教育学会(平成18年8月11日)で発表した際、竹村先生から、「心状語に絞って説明をすればより深い読み取りに結びつく」というご助言をいただいた。自分の普段の授業を考えてみると、単語の意味を説明してから心情(心状)を把握するという形が多い。単語や文法の説明が中心になってしまっていると感じる時もある。人物の心情(心状)を考えさせ、それを表している語を逆に指摘させる

などの変化を取り入れて、心状語と文脈の理解をどう関連させていくか考えていきたい。

(3) 『源氏物語』(桐壺) 冒頭部

実施時期 九月末 各クラス

対象 高校二年生

目 標 平安時代の後宮制度について知る。

桐壺の更衣と、彼女を溺愛する帝、そして周囲の女性たちの心情について考える。

○ 指導の意図・手だて

高校二年生の二学期に『源氏物語』の学習を予定しているが、生徒の現状ではかなり難しく感じられる教材である。桐壺の導入部分で、平安時代の後宮制度をわかりやすく説明し、『源氏物語』の学習をスタートさせたい。帝や桐壺の更衣、またほかの女御や更衣達がどのような立場にあったのかを理解させた上で、登場人物の心情に迫らせたいと思う。

○ 「授業の方針」(五) と関連させての工夫

1・2を目標として授業を行う。特に、冒頭の一文を丁寧に読解する。生徒には、

①天皇には多数の後がいること

②中宮は天皇の第一の後であり、女御から選ばれること

③女御は大臣家以上の姫君から選ばれるため、桐壺の更衣がどれほど天皇の寵愛を受けようと中宮にはなれなかったこと

の三点をしっかりと押さえさせたい。また、摂関政治における結婚

が、一族の権力を決定する政治的な意味合いを持つていたこともふまえた上で、桐壺の更衣一人を溺愛する帝の生き方、あるいはそれを見つめる周囲の人間の心理を考えさせたい。生徒達には「多くの女性に妬まれかわいそうな桐壺の更衣」という理解だけでなく、一族の期待を一心に背負って入内した他の女性達の、帝から全く振り向かれない絶望にも思いを至らせない。この部分までしか構想が進んでいないが、この他の女性達の嫉妬や憎悪が桐壺の更衣を死に追いやつていくことになる。このような人間の強い感情が「物の怪」となつて物語を動かすことと関連させ、理解の一助としたい。

○『源氏物語』の授業を終えて

前述の授業では、二学期の二ヶ月を使って次の場面を学習した。

・桐壺の巻……冒頭部（源氏の誕生・桐壺の死・藤壺への思慕）

・若紫の巻……北山の垣間見

・紅葉の賀……藤壺の出産

『源氏物語』のおもしろさをどう伝えるか、生徒達は魅力を感じてくれるだろうか、というのは古文の指導を始めてから、常に自分にとっての懸案事項であった。授業では古文で読む部分と現代語の小説で読む部分を作り、人物関係とストーリー展開を押さえやすいように工夫した。また、光源氏を取り巻く女性達の中でも、母桐壺の更衣と藤壺、若紫に焦点をあてて授業を進めた。他の女性達は紹介程度にとどめた。光源氏の生き方に大きな影響を与えた女性だけに的を絞つて光源氏が追い求めた女性像を考えさせようという狙いからである。

実際に授業を始めると、生徒達は非常に楽しんで古文を読むよう

になった。特に理系クラスでの反応が良く、「これまでの古文はつまらなかつたが、源氏は違う、もっと読みたい。続きを知りたい。」といった声が多く聞かれた。予想以上に好評で、古文への興味・関心を持たせることができたように思う。

なぜ『源氏物語』がこれほどに生徒を惹き付けたのか、自分なりに考えてみた。一つは生徒の年齢と、藤壺を慕い苦悩する光源氏の年齢が近いことではないかと思う。若くて美しい義理の母親への思慕と、彼女に瓜二つの少女との出会い。ドラマのような設定に、「自分だったらどっちを選ぶかなあ。」などと休み時間に話す生徒の姿も見られた。もう一つはやはり『源氏物語』の作品そのものの持つ魅力ではないかと思う。桐壺の更衣の死の場面で、彼女は「いとかく思ひ給へましかば」と死の間際に話す。もしもこのようになる定めを知つていたら……彼女は最期に何を伝えようとしたのか。「ここで読み手に想像させる紫式部はさすが、すごい。」と生徒も感じたのではないだろうか。苦しうに最期の言葉紡いだ桐壺の更衣の様子を描写する紫式部の筆致には、千年も前の作品とは思えない、鮮やかで強いものがある。生徒にその一端でも触れる機会を持つたことは、非常に有意義であつたように思う。

七 おわりに

今回、古文のおもしろさとは何なのか、改めて自分の中で考える機会をもてたように思う。答えがでたわけではないが、次のようなことを考えた。

一つは、登場人物の心情を読み取り、現代人である自分の生き方、考え方と比較して読むことである。そして、比較していく中で、登場人物の心情に共感し、時代背景が全く異なる古人と自分の心情が重なる瞬間に、人間とはどういう存在なのか、思いを深めることができるのではないかと思う。

二つめは、作者の記述の視点を読み取り、その底にある作者の意図を考えることである。

『虫めぐる姫君』のおもしろさは、姫君の言動がおもしろいからだけではない。『本地たづねたるこそ心ばへをかしけれ』と正当なことを主張する姫君を、作者が笑いの種として位置づけたのはなぜか。それを考えることがおもしろいのではないか。この提案は竹村先生からいただいたものであるが、私もおおいに興味をそそられた。このような授業をするには冒頭部を学習しただけでは足りない。文章の内容を理解するだけではない、その奥に見え隠れするものを読み解く授業を作り出していきたいと思う。

自分の授業の反省すべき点としては、読解中心の授業、知識の植え付けに偏りがちになることが挙げられると思う。もつと生徒に自由に意見を出させ、読解した内容に対する自分の意見を発表する機会等を設けていきたい。評価もテストによる点数化が基本である。

もう少し多様な視点で評価のあり方を考えたい。また、生徒の興味、関心を引き出すため、自分の古典分野に関する知識を深めていかなければならないと感じている。

私立の進学校に勤務して五年目だが、そろそろ本格的に受験勉強をさせなければならぬ、という思いにいつの間にか圧迫されてい

たように思う。しかし、点を取るための勉強などやはり意味のないものである。生徒達が受験を終えてから、古典作品に触れた時に楽しみを見いだせるよう、あるいはふとした瞬間に古人と共通する思いを抱き、そのことに気付くことができるような、そのための授業を作ることができればと思う。

(付記)

発表に際して、竹村先生には温かい励ましの言葉をいただきました。多くの同窓生と再会し、教師としての悩みや喜びを語り合うことのできる貴重な機会を与えてくださったことに感謝しています。

現在、私は、優しい素直な生徒達に生まれ充実した教員生活を送っています。大学時代、一般企業への就職を考えた時期もありましたが、自分の夢である教員という職に就くことを選んで本当に良かったと思っています。広島大学で過ごした四年間は価値あるものであったと感じずにはいられません。

今の教師としての自分があるのは、厳しく、そして温かくご指導してくださった江端義夫先生のおかげです。本当にありがとうございます。

(関西学園 岡山中学校・岡山高等学校)